

2021年4月の行事予定表

1	木	祈祷会(洗足の木曜日)	16	金	
2	金	受難日	17	土	
3	土		18	日	伝道礼拝式、(証し) 礼拝後、交流会(グループで分かち合い)
4	日	イースター・礼拝式(聖餐式)、 教会第二墓地にて墓前礼拝式	19	月	
5	月		20	火	同上
6	火		21	水	
7	水		22	木	祈祷会
8	木	祈祷会	23	金	
9	金		24	土	
10	土		25	日	礼拝式、礼拝後、通常教会総会を開催
11	日	礼拝式、教会役員会	26	月	
12	月		27	火	
13	火		28	水	
14	水		29	木	(昭和の日)
15	木	祈祷会	30	金	

4月お誕生・洗礼記念日の皆様、おめでとうございます。

編集後記

- ◇ 今年の3月11日は東日本大震災から満10年で、当時の甚大な被害そして10年を経ても未だに消えることのない人々の痛みが報じられました。
- ◇ 私は当時の避難所の報道で忘れられない光景があります。或るグループが大きめの洗面器、バケツ、たらいを持ち込んで、長いあいだお風呂に入れたい方々のために「お湯で足を洗う」ボランティアをされたのです。
- ◇ 「ああ、気持ちがいい。久しぶりだ、こんな気分は」と、笑顔がこぼれ、はらはらと涙する人、誰にも話すことが無かった思い出をポツポツ語る人……。
- ◇ 2000年前、イエス・キリストが十字架に架けられた金曜日の前夜、イエス様は弟子たちの足を洗って下さり、「あなた方も互いに足を洗い合わなければならない」と言われました。
- ◇ 「あなたも」というお言葉が胸奥にこだまします。

教会月報

2021年4月

No.359

岡山ナザレン教会 月報編集委員会

復活を生きる

「天使は女たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを探しているのだろうが、あの方は、ここにはおられない。かねて言われていた通り、復活なさったのだ。さあ遺体のおいてあった場所を見なさい』」
マタイ福音書28章5, 6節

イエスと生前、出会いを経験し、福音によって、人生を根本的に変えられた弟子たちや女の人たちは、イエスの身に起きた十字架の死という事実には呆然自失となりました。なぜならば、真の神として世に来られたイエスを信じて従っていたからです。今、目の前で起きていることは、夢か幻かといえるものでした。しかし動かしがたい事実であった。

さて、私たちは夜眠る時、明日の時は必ず来ることを疑うことなく休みます。夜の祈りで、平安を与え心騒がず悪夢に妨げられることなく、安らかな睡眠を与えたまえと祈ります。それは当然、明日が巡ってくることを前提としているからです。全ての人の命は神の手の中にあります。神の子イエスもまた同様でありました。彼は十字架上で祈りました。『わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか』と。しかし、神は沈黙されたのでした。イエスは自身の死が、人の贖い(贖罪)となる事を受け入れつつ十字架の死を受容されました。処刑された金曜日から数え3日目の日曜日の朝、驚くべき出来事が起きます。それが復活であります。女の人たちが墓に参りますと、墓はからでありました。そして、天使は、あのお方(イエス)は、復活なさったと告げたのです。

今日、世界中でキリスト者(クリスチャン)は、復活の命に生かされています。その意味は、使徒パウロが語るように『私はキリスト共に十字架につけられました。生きているのは、もはや私ではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。』の言葉に凝縮されています。(ガラテヤ2:19-20)

死を超えた新しい命、復活されたイエスの命に生きているのがキリスト者であります。

牧師 永松 清

HAPPY EASTER!

2021.4.4 イースター おめでとう!

4月4日(日)イースター(復活祭)を期して、通常礼拝が再開しました。そこで、コロナ禍でこの一年、なかなか全員で会えない状況でしたので、皆さんのこの一年で「思い出深いこと」「印象に残っている聖句」「皆さんと分かち合いたいこと」「これからに思うこと」などが寄せられました。

寄稿「どんな一年、 これまで・これから」

M.O.兄

コロナに始まりコロナで終わると思っていましたが、まだまだ先が見えないです。兵庫の地では変異ウイルスの拡大が危ぶまれています。日曜礼拝はやはり教会で皆さんと会って礼拝に感謝し、その後に話をしてコミュニケーションする事が私は大事だと思っています。そういう環境になることを祈っています。4月4日に会える事は嬉しいです。

S.O.姉

コロナ禍、新聞を読む時間が自然と長くなり、それが功を奏し「詩編」を読むきっかけとなりました。一つは、バイデン米大統領が、詩編 30-6 を織り込んだ就任演説をした記事でした。泣きながら夜を過ごす人にも 喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。この解釈を、新聞社がそれぞれ違った言葉で紹介しており、おもしろい! と思いました。

二つ目は、朝日新聞の連載小説「また会う日まで(池澤夏樹・作)」です。主人公は、大正から昭和の時代を生きた実在人物がモデルの小説で、地位ある海軍軍人(現在も連載中)。私が興味を引かれるのは、主な登場人物がクリスチャンであり、聖書引用が



胸赤(ムネアカ)コマドリ

ヨーロッパ、特にイギリスで人々に親しまれる野鳥がいるそうです。この特徴的な赤い胸の由来にまつわる話はイースターの時期に語られ、日本でも絵本「むねあかどり」として出版されています。ある日、十字架に架けられたイエス・キリストの血が胸にかかって赤く染まり、以来、胸が赤い鳥になったというお話です。

美しい文語体で書かれていることです。

—あしき者はものかりて償わず 義きものは恵ありて 施しあたふ(詩編 37-21) —。刺激を与えられ、私は、詩編を最初から読むことに決めました。そして、新共同訳や文語訳聖書を用い先日 150 篇を読み通すことができました。胸を叩きながらの嘆き、また、高らかに神への賛美……短いセンテンスが快く響いて残ります。

もう一つ、頭の体操。聖句の暗唱。覚えたい聖句を付箋に書き止め、台所に張っています。が、こちらは、一夜明ければ、すっかり忘れて定着しません。夏季学校の子どもたちはあっぱれ! です。

B.Y.姉

私は、ヨブ記23章10節を暗記しています。「しかし、神はわたしの歩む道を知っておられるはずだ。わたしを試してください 金のようであることが分かるはずだ。」これは私たちに伝える重要なみ言葉です。自分が弱い時も思います。イエス様が私を訓練できるように、私が正しく信仰できるようにこのみ言葉を私に伝えた、と感謝します。

コロナもあって苦難の世の中、もともと聖徒たちは、心を合わせて祈る必要あると思いました。YouTube 礼拝の皆も恵まれますように、イースターを、喜びつつ皆で迎えましょう。

K.E.姉

3月21日成人科の学び(ヨハネ17:20~26)のこと。聖書は訳本、代名詞が一杯。何が何やら、分からないようになります。『彼ら』という箇所、名詞(教会名や自分の名前)を入れることにより、明確になりました。父と子が一つであるように、キリスト者も一つになる。代名詞(編注:彼ら)を変えてイエスの祈りを読むだけで、我に迫りくるものがありました。何かが変わるような気がしました。



先週イエスの名によって願う時、必ず神に届けられる、と。

今年こそ、聖書を工夫して、代名詞に具体的な名詞を入れるとか、大きな声で読むとか、変化をしたいと思います。それによって、何かがあることを期待して、模索していきたいです。

M.M.姉

印象に残っているのは、3月14日(日)の K.O.姉の送別会です。映像、賛美歌も良かったし、K 姉と良い交わりが出来ました。「お祈りしてます」と言ってくださったことが何より嬉しかった。

いま一番残っているみ言葉は、礼拝の招詞・ヨシュア記1章5節「一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。」。私は、教会の皆に支えられて幸せです。

K.O. 姉、お元気で!



教会学校の子供たちと

3月14日は K.O. 姉の岡山最後の礼拝式となりました。4年間共に交わりを持ち、CSでも教師として奉仕して下さった K さんでした。2年前のクリスマスに K さんがデュオで歌ってくれた「May the Road rise to meet you あなたの前に道が開かれますように」を送別に流しました。本来なら送別会をし、寄書きを贈ったり、この曲を贈るにしても皆で練習し讃美して贈ることも出来るはずでしたが、コロナの状況下では会食もかなわず、沢山で集まることも歌うことも出来ず、本当に残念でした。けれど限られた礼拝出席者(15名うち子供1名)で、歌詞はパワーポイントで映し出して K さんの懐かしい写真も合わせて上映しながら「主が道を備え追い風心きますように、陽が行く手照らし雨が優しく降りますように、また会う日まで主が御手の中で守られますように・・・」と心合わせて見ました(笑、涙)。上映の3分ほど、しみりと、でも若い旅立ちを心から祝う思いにみたまされました。

更にCSの子供と父兄もかけつけて(子供6名+親4名)プレゼントや手紙を渡すシーンもありました。新たな歩みに神様の祝福がありますように!



ごあいさつ

最後の礼拝の日、素敵な時間を設けてくださりありがとうございました。なかなか引越しの片付けと荷造りが進まず、どうして進まないのかを考えたとき、荷造りをしてしまったら岡山を離れることに対して現実味が湧いてしまうからだと気づきました。縁もゆかりもなく、初めは誰も知っている人がいなかった岡山ですが、4年間の間にたくさんのお会いに恵まれて、今では高校時代を過ごした

K.O.姉

地域よりも岡山の方が知っている人が多くなっていました。「教会を軸に生活をしない」という母の言葉をどこまで素直に守れたかどうかはわかりませんが、この岡山の生活において教会の存在が大きかったことは言うまでもありません。皆さんと簡単に会えなくなってしまうのはとても寂しいですが、またいつかお会いできることを楽しみにしています。本当にありがとうございました。